

今週
のこ
とば

「わたしは、ダビデに一つの正しい若枝を起こす」

(エレミヤ書23章1節～6節)

「見よ。その日が来る。一主の御告げ—その日、わたしは、ダビデに一つの正しい若枝を起こす。彼は王となって治め、栄えて、この国に公義と正義を行う。その日、ユダは救われ、イスラエルは安らかに住む。その王の名は、『主は私たちの正義』と呼ばれよう。」(23:5,6)

(ヨハネの福音書18章23節～40節)

「すると彼らはみな、また大声をあげて、『この人ではない。バラバだ』と言った」(18:40)

今日のメッセージ要旨

◎神様は私たち一人ひとりに決断を求められる場合があります。その場合は人は、ともすれば他の人がどのような態度を取るかに左右されやすいのです。しかし、信仰とは「神さまと自分」という個人的なことなのです。真心からの応答をしたい。

◎エレミヤ書23章1節以下、「新しい王朝の希望」が記されています。神様は悪政を行って民を苦しめている政治的指導者に語りかけておられるのです。彼らが正しい政治を行わないので罰すると告げられたのです。しかし、神様は、神様に忠実な者を残し、国を回復させ、新しい指導者を立てると約束されたのです。

「終末の日」にはダビデ家に属する新しい王が登場し、神様の民を救いと平安に導くのです。人々は出エジプトの神様ではなく、バビロンから解放された神様を証しするようになるのです。そして終末の日には、ダビデの子孫として生まれるメシア、キリスト(33:15-16,ゼカヤ3:8,6:12)の誕生が成就するのであり、真実な解放が起こるのです。

◎ヨハネの福音書18章には、ゲツセマネの祈り、イエス様の逮捕、大祭司の前のイエス、ペテロがイエスを知らないと言う、大祭司がイエスを尋問する、ペテロが再び知らないという、ピラトの前のイエス、死刑の宣告、が記されています。

イエス様はあえて園に行かれたのです(1)。「ご自分に起ころうとすることをすべて知っておられた」ので(4)、覚悟が出来ていたのです。ペテロと弟子たちは自分と周りで起こっていることが受け止められないでいたのです(17～)。

祭司長たちが遣わした人々が一隊の兵士(約200人～600人)を伴ってやってきた。ユダが彼らを先導した(1-5)。ペテロは大祭司のしもべに切りつけたが(10)、主はペテロを戒め、しもべを癒やされた(ルカ22:51)。主は弟子たちをかばい逃がして、ご自分ひとり囚われの身となられた(8-9, マタイ26:56)。やがて彼らは殉教の道を歩むのだが、この時はまだその力がなかった。主は彼らの力を知っておられた。

特に、後半には、ユダヤ人が過越の祭のために汚れを受けないようにピラトの官邸の中に入らなかったため、総督ピラトは官邸を出たり入ったりしたのです。

ピラトはイエス様に三度質問をしましたが(33, 37, 38)、反対に、イエス様はピラトの真実な思いを引き出そうとしておられたのです。ピラトはイエス様の内に死刑に当たるような罪を見いださなかった事をユダヤ人に告げたのです(19:4, ルカ23:4, 14, 22)。ピラトは更に、ユダヤ人の王として訴えられたイエス様を過越の祭の慣例によって釈放することを提案したのです。人々はこぞってバラバの釈放を要求したのです。これはピラトにとっては最も好まない選択であったのです。なぜなら、バラバは強盗であったと記されていますが、熱心党運動の過激な革命運動家として逮捕されていたからです。ピラトは自分の地位を保つためやユダヤ人の歓心を買うためイエス様に死刑の選択をしたのです。私たちにも主イエスは真実な信仰告白を求めて、一人ひとりに語っておられるのです。「バラバか、イエスか」と。私たち個人個人も事あるごとに決断をしなければならないのです。